

	牧師 山本護	司式 福田奈里子	奏楽 山本恵美
前 奏	黙想		祈 禱
讃美歌	20 主をほめよ、わがこころ		讃美歌 520 しずけき河のきしべを
祈 禱			献 金
信仰告白	教団戦責告白と使徒信条		讃 詠 547 いまささぐるそなえものを
聖 書	申命記 13:5~6		黙 禱
	エフェソの信徒への手紙 2:17~18		主の祈り 564
讃美歌	402 主のしもべの		頌 栄 542 世をこぞりて
説 教	『イスラエルの民になる』		祝 禱 後 奏

紀元前13世紀頃、エジプトを脱出したイスラエルの民は約束の地カナン(パレスチナ)に到達した。斥候はモーセに「そこは乳と蜜が流れる所でした。これがその果物です(民数13:27)」と報告。豊穡な土地だから人口も多い。専門家によると当時200~300もの都市国家が存在していたらしい(13:28~29)。

「我々は町を一つ残らず占領し、町全体、男も女も子供も滅ぼし尽くして一人も残さず、家畜だけを略奪した(申命2:34~35,3:6~7)」。カナン定住に際しての虐殺行為にはほとんど幻滅させられる。イスラエルのカナン入植について、「軍事的征服説」と、慎ましい牧畜を営む「平和的浸透説」といった論争があり、考古学資料の判別も難しいようだ。現在のイスラエル国内においては、タカ派が前者を、ハト派は後者の歴史観を支持しているらしい。いずれにせよ私たちが想像する「平和」とは随分違う。

「あなたたちは、あなたたちの神、主に従い、これを畏れ、その戒めを守り、御声を聞き、これに仕え、これにつき従わねばならない(申命13:5)」。豊穡なカナンの富を保障する神ではなく、「奴隷の家から救い出してくださった(13:6) 貧しくとも自由を与える神。この主なる神に忠実であれ、と。だが民は偉大なエジプト脱出の旅を忘れ、富や武力に傾きやすい。「預言者や夢占いをする者は処刑されねばならない~あなたの神、主が歩むように命じられる道から迷わせようとするからである(13:6)」。夢占いは富や武力を讃える。こうした預言者は、異民族というより、イスラエルの中に現われる(13:6)。

あの旅の途上モーセはこう言って民を落ち着かせた。「主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい(出エジプト14:14)」。神の戦いは、対部族でも、対民族でも、対国家でもない。富を独占し、力で脅し、人間を奴隷化する罪が、神によって滅ぼされる。神の敵は、イスラエルの内外にいる。今日の教会の内外にいる。ゆえに「主の平和=シャーローム」のためには神が戦われる。

カナンの都市国家は、当時としては当たり前なのだが、少数の支配者が民を奴隷のように扱うことで成り立っていた。加えて「アピル」と呼ばれる不可触民が相当数いたらしい。長い旅をして来たイスラエルには階層はなく、その姿はアピルのように薄汚れていただろう。カナンにいる者すべてをイメージしてみると、イスラエルが定着していく様子がぼんやり目に浮ぶ。「あなたたちの神、主に従い、これを畏れ、その戒めを守り、御声を聞き、これに仕え、これにつき従わねばならない(申命13:5)」。 「主」は、カナンで酷使されていた奴隷やアピルにとっても、「あなたたちの神」になっていった。

無力な旅人集団であったイスラエルが、膨大な数の先住民を殲滅させて、入れ替わったのではない。主に従いエジプトを脱出した奴隷がイスラエルの民となったように、カナンの奴隷や不可触民も主を神とすることでイスラエルの民になっていった。イスラエルとは血統でも、特定の民族でもない。「主に従い、畏れ、戒めを守り、御声を聞き、仕え、つき従う(13:5)」者こそ神の民イスラエルなのだ。

「キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせた(エフェソ2:17)」。宣教は平和運動だ。教会勢力を拡大するためのものではない。平和の福音に捉えられた私たちは、エジプトからの旅を身に負う民としてこの地でキリストに仕えていく。

イスラームも仏教も市民運動も平和を掲げている 貧困や人権や環境などの問題解決も訴えている この位置で共に働くことはできる キリストの宣教はこうした事柄の 見えない底部への働きかけ

敗戦の日直前の主日、教団議長による「戦争責任告白」を共に唱えます。細かな文言は論議する所ありますが八ヶ岳教会はこの告白を大切にしています。8/20(土)1:30~メディカル・カフェの開催。

礼拝堂・集会所の住所: 408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3

連絡・問い合わせは牧師へ: 408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324 TEL 0551-25-4008

メール komechan.olive@orange.zero.jp HPは「日本基督教団八ヶ岳教会」で検索して下さい。

## 第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白（戦責告白）

わたくしどもは、1966年10月、第14回教団総会において、教団創立25周年を記念いたしました。今やわたくしどもの真剣な課題は「明日の教団」であります。わたくしどもは、これを主題として、教団が日本及び世界の将来に対して負っている光栄ある責任について考え、また祈りました。

まさにこのときにおいてこそ、わたくしどもは、教団成立とそれにつづく戦時下に、教団の名において犯したあやまちを、今一度改めて自覚し、主のあわれみと隣人のゆるしを請い求めるものであります。

わが国の政府は、そのころ戦争遂行の必要から、諸宗教団体に統合と戦争への協力を、国策として要請いたしました。

明治初年の宣教開始以来、わが国のキリスト者の多くは、かねがね諸教派を解消して日本における一つの福音的教会を樹立したく願ってはおりましたが、当時の教会の指導者たちは、この政府の要請を契機に教会合同にふみきり、ここに教団が成立いたしました。わたくしどもはこの教団の成立と存続において、わたくしどもの弱さとあやまちにもかかわらず働かれる歴史の主なる神の摂理を覚え、深い感謝とともにおそれと責任を痛感するものであります。

「世の光」「地の塩」である教会は、あの戦争に同調すべきではありませんでした。まさに国を愛する故にこそ、キリスト者の良心的判断によって、祖国の歩みに対し正しい判断をなすべきでありました。

しかるにわたくしどもは、教団の名において、あの戦争を是認し、支持し、その勝利のために祈り努めることを、内外にむかって声明いたしました。

まことにわたくしどもの祖国が罪を犯したとき、わたくしどもの教会もまたその罪におちいりました。わたくしどもは「見張り」の使命をないがしろにいたしました。心の深い痛みをもって、この罪を懺悔し、主にゆるしを願うとともに、世界の、ことにアジアの諸国、そこにある教会と兄弟姉妹、またわが国の同胞にこころからのゆるしを請う次第であります。

終戦から20年余を経過し、わたくしどもの愛する祖国は、今日多くの問題をはらむ世界の中にあって、ふたたび憂慮すべき方向にむかっていることを恐れます。この時点においてわたくしどもは、教団がふたたびそのあやまちをくり返すことなく、日本と世界に負っている使命を正しく果たすことができるように、主の助けと導きを祈り求めつつ、明日にむかっての決意を表明するものであります。

1967年3月26日 復活主日 日本基督教団総会議長 鈴木正久

※八ヶ岳教会では、毎年8月15日敗戦の日直前の主日礼拝で、この「戦責告白」を唱えています。日本基督教団総会議長によるこの歴史的告白を、同教団に属する教会として自らのものとし、キリスト者としての戦争責任を自覚する機会にしています。